

アジア・太平洋地域の貿易構造

農林水産政策研究所

上席主任研究官 河原昌一郎

主任研究官 井上荘太郎

主任研究官 明石光一郎

アジア・太平洋地域は、地理的にはアメリカ西海岸からオセアニア、インド洋を含む広範な地域をその範囲とします。この地域の特徴は、各国間に多くの場合は海が介在し、歴史的、文化的に多様であって、ヨーロッパのEUのような地域全体を覆うような国家連合的組織が存在しないことです。

しかしながら、近年では、この地域においても、ASEANと日本、中国等がそれぞれFTAを締結するいわゆる「ASEAN+1」の形での経済連携が進展するとともに、ASEANを中心とした各種フォーラムが重層的に形成されるようになっていきます。

この地域の主要な貿易国は「東アジア首脳会議」（ASEAN+6）の構成国でもあるASEAN諸国、日本、中国、韓国、インド、オーストラリア、ニュージーランドであり、また、アメリカは政治・経済的にこの地域で大きな役割を果たしています。このため、本研究では、以上のASEAN諸国+7カ国を対象として、その相互の貿易関係、貿易構造等を分析しました。

これらアジア太平洋諸国間の貿易の近年の大きな特色は、中国の著しい貿易増加がこれら諸国間の貿易構造等の最大の変動要因となっているということです。

2003年と2008年（いずれも3年平均値。以下同じ。）の比較でみると、中国がASEAN諸国との貿易額を増加させて貿易結合度を高めたことによって、2003年では日本、ASEAN、アメリカで形成されていた貿易グループが、2008年では日本、ASEAN、アメリカに中国を加えた新しい形での貿易グループの形成が見られるようになっていきます。

アジア太平洋諸国間の貿易構造の大きな規定要因となっているのは中国の「加工貿易」です。中国の「加工貿易」は機械・電機を対象として行われ、日本およびASEAN諸国から部品、半製品を輸入し、中国で加工した完成品をアメリカに輸出することを基本的な構造としています。「加工貿易」は中国の貿易全体の約半分を占め、そのほとんどは外資企業によって担われています。したがって、「加工貿易」は中国の技術力を反映するものではありません。2003年から2008年にかけて中国の対米「加工貿易輸出」は急増し、アメリカの貿易赤字の最大の要因となっています。こうした中で、人民元のUSドルに対するレートは実質的に固定化されたままとなっているので、今後とも中国の対米貿易黒字が続けば、為替レートの見直しが求められることになります。

中国は、この時期に一方では鉱物・資源の輸入を大きく拡大させており、2008年の輸入額は2003年の約5倍となりました。国別ではオーストラリアからの輸入が大きく伸びており、2008年のオーストラリアの鉱物・資源の輸出の3分の1が中国向けとなっています。

日本は、アジア太平洋諸国間の貿易では、農水産物、鉱物・資源を輸入する一方で、中国、ASEANを加工貿易の輸出拠点として利用するという貿易形態をとっています。ただし、同地域内における中国の貿易拡大によって、日本の貿易シェアは減少しました。

アメリカは、同地域の貿易では、農水産物以外の品目は全て輸入超過となっており、同地域での巨大な市場を提供しています。同地域の貿易、経済の発展はアメリカ市場の存在による場所が大きいのです。なお、アメリカ市場への輸出についても、中国が輸出シェアを大きく拡大させています。

（本研究は、平成22年度行政対応特別研究「アジア、太平洋諸国における経済連携に関連した貿易構造等の分析」の一環として行ったものです。）

（文責：河原昌一郎）